

第4章 第26次調査（大塚講堂改修地点）

第1節 調査の概要

1. 調査にいたる経緯

1965年に建設された大塚講堂の改修および増築が決定され、それに伴い増築部分の東側と南側において埋蔵文化財発掘調査を行う必要性が生じた。

調査区の位置は、第25次調査地点（附属図書館蔵本分館増設Ⅱ期地点）の西側で、第14次調査地点（医薬資源教育研究センター新営地点）の北東側である（第2図）。前者では、幅10mの旧河道が確認されている。後者では近世の道・溝・耕作痕跡などのほか、古墳時代の溝、弥生時代と考えられる柱穴などが検出されている。本地点においても、第25・14次調査と同様の遺構が確認される可能性が高いと予想されたため、発掘調査を実施した。調査面積は約1,030㎡である。2012年6月2日には現地説明会を実施し、調査成果の公開を行った。



第32図 調査風景

a 旧河道1掘り下げ（東から） b 現地説明会の様子

2. 調査体制と期間

調査主体 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室（室長・中村 豊）

調査担当 中村 豊

遠部 慎（埋蔵文化財調査室・助教）

山口雄治（埋蔵文化財調査室・特任助教）

調査補助 板東美幸、古川裕美、前田千夏、山本愛子
（以上、施設マネジメント部技術補佐員）

調査期間 2012年4月9日～6月10日

3. 調査地点の位置と区割り

(1) 調査地点の位置

調査地点の所在地は、徳島市蔵本町3丁目18番地の15で、本学蔵本キャンパスの北西部にあたる。また、第25次調査地点（附属図書館蔵本分館増設Ⅱ期地点）の西側、第14次調査地点（医薬資源教育研究センター新営地点）の北東側に位置する。

(2) 調査地点の区割り

調査にあたっては、建設予定地となる掘削範囲を6分割し、旧大塚講堂の東側に位置する調査区を北から第1～5調査区とし、南側に位置する調査区を第6調査区と設定した（第33図）。工事の工程に従い、北側の第1調査区から順に南に向かって調査を進めた。

4. 調査の概要

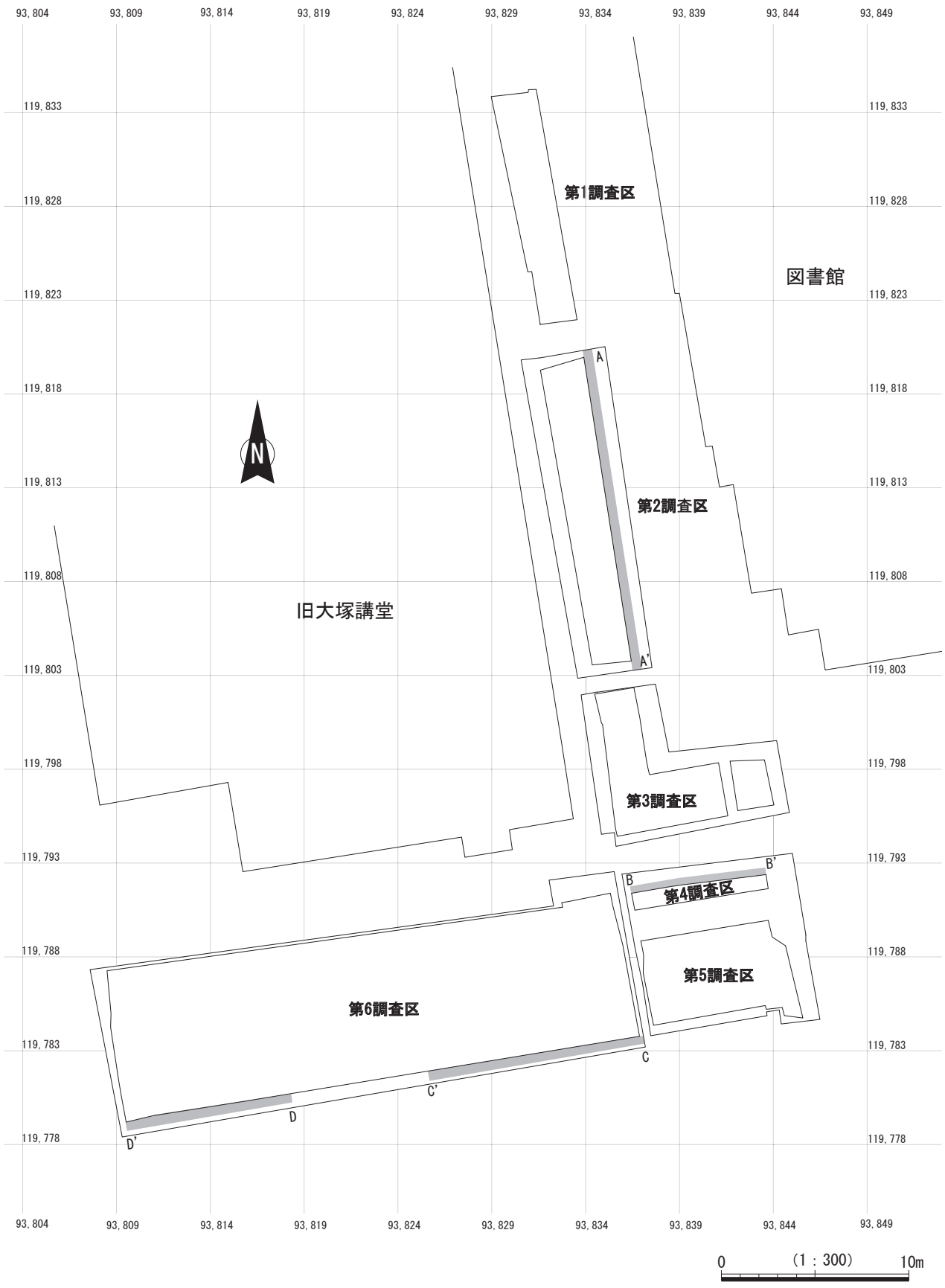
本調査地点では、3つの遺構面を設定し、弥生時代前期中葉（Ⅰ-2様式）から近世にわたる遺構を確認した。なお、第1遺構面では明確な遺構は認められなかった。出土遺物は少なく、コンテナで土器4箱、木器・植物遺体は2箱、合計6箱である。以下、遺構面ごとにその概要を述べる。

(1) 第3遺構面

本遺構面では弥生時代Ⅰ-2様式と考えられる溝を3条検出している。これらの溝は用水路としての機能が想定される。遺物は非常に少なく弥生土器の細片のみである。

(2) 第2遺構面

本遺構面では、弥生時代前期末・中期初頭（Ⅰ-3・4様式）～中世の一時期に属する旧河道、溝、井戸を検出している。本地点の遺物の多くは、旧河道1から出土したものであり、ここからは、弥生時代の土器、打製石鏃、古墳時代～古代の須恵器が出土している。このほかには、井戸1の埋土から、布留式0～1式期の甕1点がほぼ完形の状態で出土しており、井戸の廃絶に伴った祭祀行為が行われた可能性が推定された。



第33図 調査地点の区割りと土層断面の位置

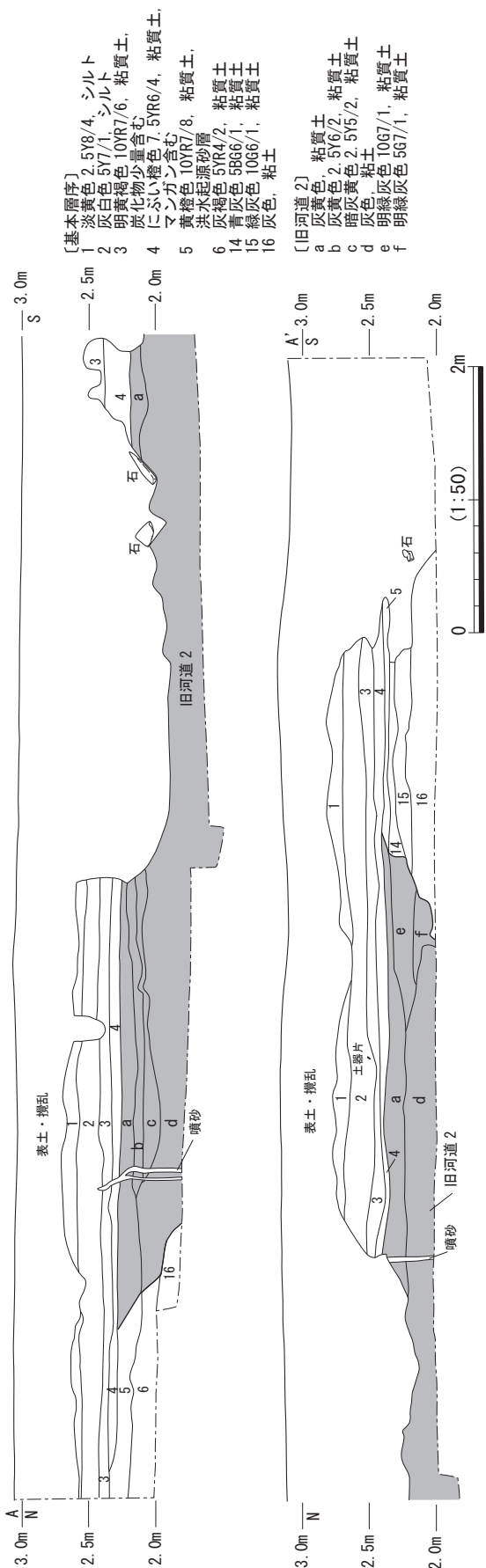
第2節 調査成果

1. 基本層序

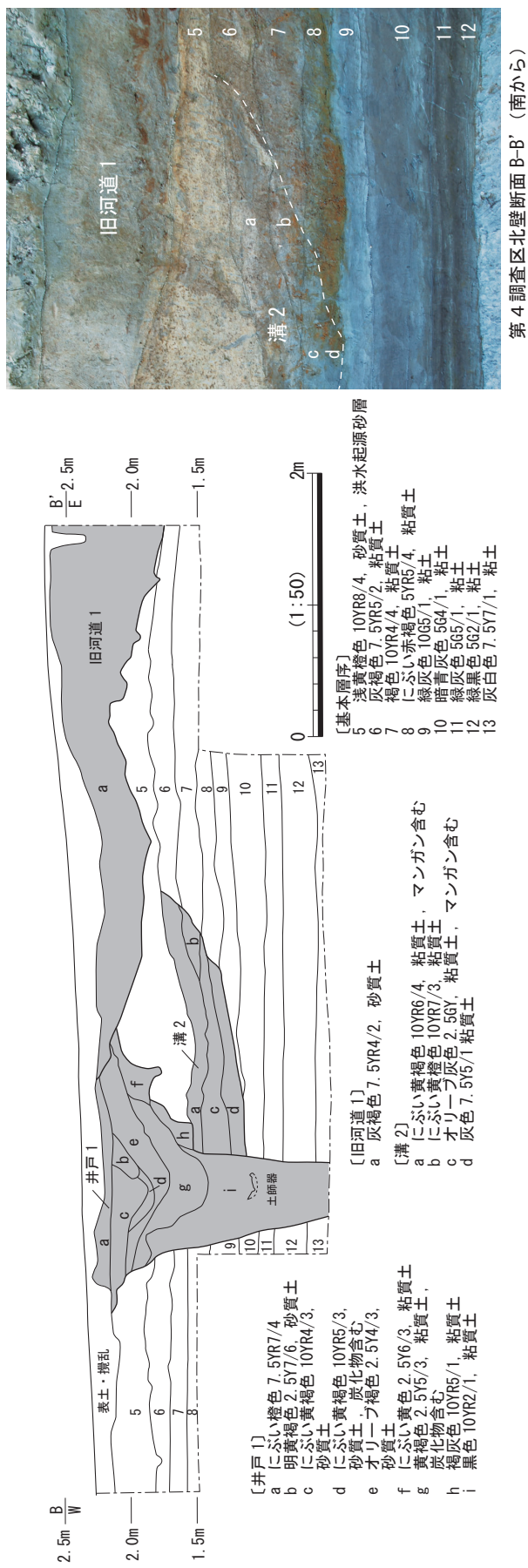
第2・4・6調査区の層序を第34～36図に示している。基本層序は1～16層からなり、1～5・14～16層は第2調査区東壁（第34図）、6～13層は第4調査区北壁（第35図）をもとに説明する。14～16層は6層以下に相当するが、6～13層との対応関係は不明である。なお、現地表面は標高3.0～3.1mであり、そこから、第1調査区では標高2.7m前後、第6調査区では標高2.8m前後まで造成土が堆積する。

- 1層 淡黄色 2.5Y8/4 のシルトで、グライ化している。上面の標高は2.7m、厚さ5～10cmである。近代の水田層と考えられる。
- 2層 灰白色 5Y7/1 のシルトで、グライ化している。上面の標高は2.6m、厚さ20cmである。近世の水田層と考えられる。
- 3層 明黄褐色 10YR7/6 の粘質土であり、第1調査区から第3調査区にて確認される。炭化物を少量含む。上面の標高は2.3～2.4m、厚さは10cmである。
- 4層 にぶい橙色 7.5YR6/4 の粘質土である。マンガンを含んでいる。上面の標高は2.4～2.5m、厚さ10cmである。既往の調査から、弥生時代I-3・4様式～中世の土壌化層と判断される。
- 5層 黄橙色 10YR7/8 の粘質土である。本調査地点全体を覆っており、これまでの庄・蔵本遺跡の各調査地点においても検出される。上面の標高は2.4m、厚さは10～20cmである。第2調査区では薄く堆積する。弥生時代I-2～3・4様式を中心とする洪水起源砂層である。
- 6層 灰褐色 7.5YR5/2 の粘質土である。上面の標高は1.9m、厚さは20cmである。既往の調査では、本層上面から弥生時代I-1・2様式の遺構が検出されている。
- 7層 褐色 10YR4/4 の粘質土である。上面の標高は1.6～1.7m、厚さは20～30cmである。
- 8層 にぶい赤褐色 5YR5/4 の粘質土である。上面の標高は1.5m程度、厚さは15cm前後である。
- 9層 緑灰色 10G5/1 の粘土である。上面の標高は1.3～1.4m、厚さは10cm前後である。
- 10層 暗青灰色 5G4/1 の粘土である。上面の標高は1.2～1.3m、厚さは20～30cmである。
- 11層 緑灰色 5G5/1 の粘土である。上面の標高は1.0m程度、厚さは15cm前後である。
- 12層 緑黒色 5G2/1 の粘土である。上面の標高は0.8～0.9m、厚さは25cm前後である。
- 13層 灰白色 7.5Y7/1 の粘土である。上面の標高は0.6～0.7m、厚さ10cm以上である。
- 14層 青灰色 5BG6/1 の粘質土である。上面の標高は2.3～2.4m、厚さ5～10cmである。
- 15層 緑灰色 10G6/1 の粘質土である。上面の標高は2.3m、厚さ10cmである。
- 16層 灰色の粘土である。上面の標高は2.2m、厚さ20cm以上である。

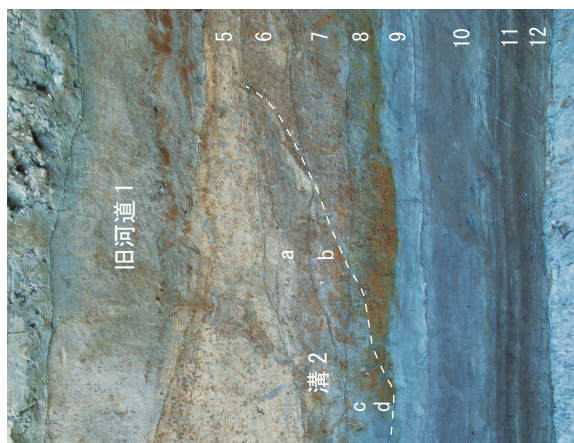
本調査地点では、基本的に1層上面を第1遺構面、5層上面を第2遺構面、6層上面を第3遺構面と設定した。



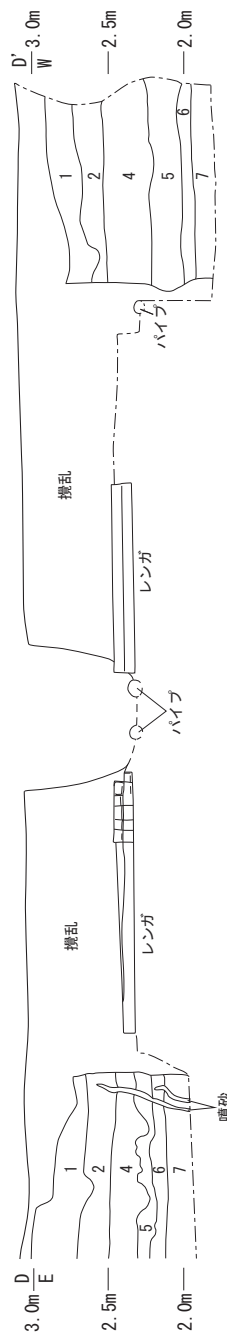
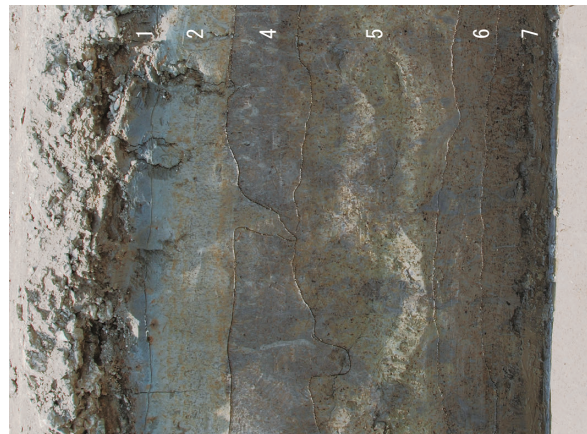
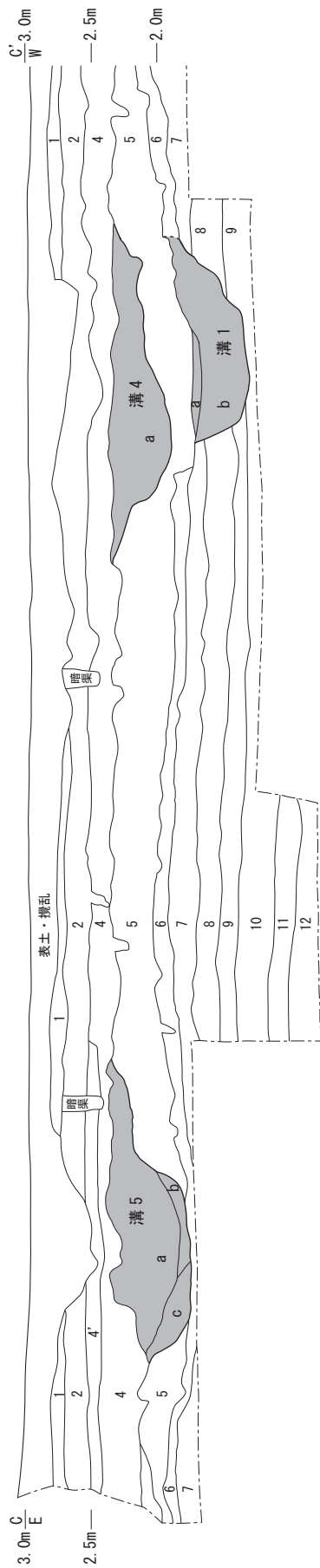
第34図 第2調査区東壁A-A'土層断面



第35図 第4調査区北壁B-B'土層断面



第4調査区北壁断面B-B' (南から)



- [C・D断面基本層序]
- 1 緑灰色 5G6/1 シルト
 - 2 明黄褐色 10YR7/6 粘質土
 - 4 黄灰色 2.5Y4/1 粘質土
 - 5 黄褐色 10YR8/8 粘質土
 - 6 黄褐色 10YR5/6 粘質土
 - 7 黄褐色 2.5Y5/3 粘質土
 - 8 赤褐色 5YR5/4 粘質土
 - 9 緑灰色 10G5/1 粘土
 - 10 暗青灰色 5G4/1 粘土
 - 11 緑灰色 5G5/1 粘土
 - 12 緑黑色 5G2/1 粘土
- [溝5]
- a にごい褐色 7.5YR6/3
 - b にごい褐色 7.5YR7/4
 - c にごい褐色 7.5YR5/3
- [溝4]
- a にごい褐色 7.5YR7/3
- [溝1]
- a 黄色 2.5Y8/6
 - b 灰色 10Y5/1



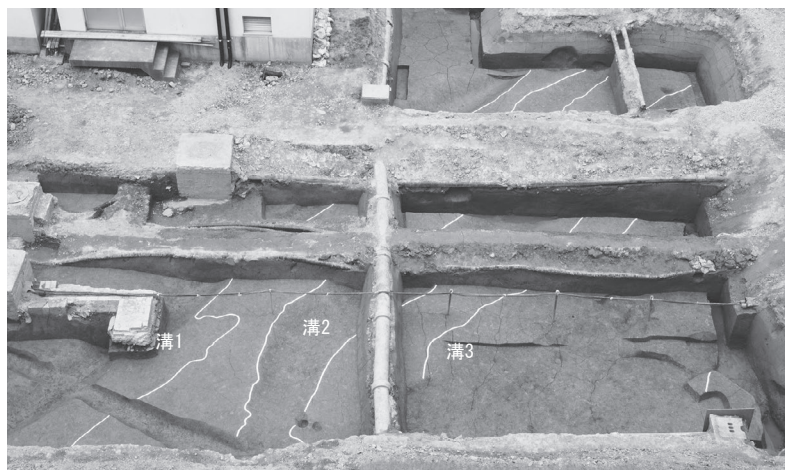
第36図 第6調査区南壁 C-C'・D-D' 土層断面

2. 第3遺構面の遺構と遺物

(1) 溝（第35～38図）

溝1 第3・6調査区に位置する。

6層上面もしくは7層上面で検出され、検出面の標高は1.85mである。残存長18.5m前後、最大幅2.0m、底面の標高1.3mで、検出面からの深さ55cmである。第6調査区南壁土層断面（第36図）によると、埋土は2層確認され、上層は黄色2.5Y8/6土、下層は灰色10Y5/1土である。



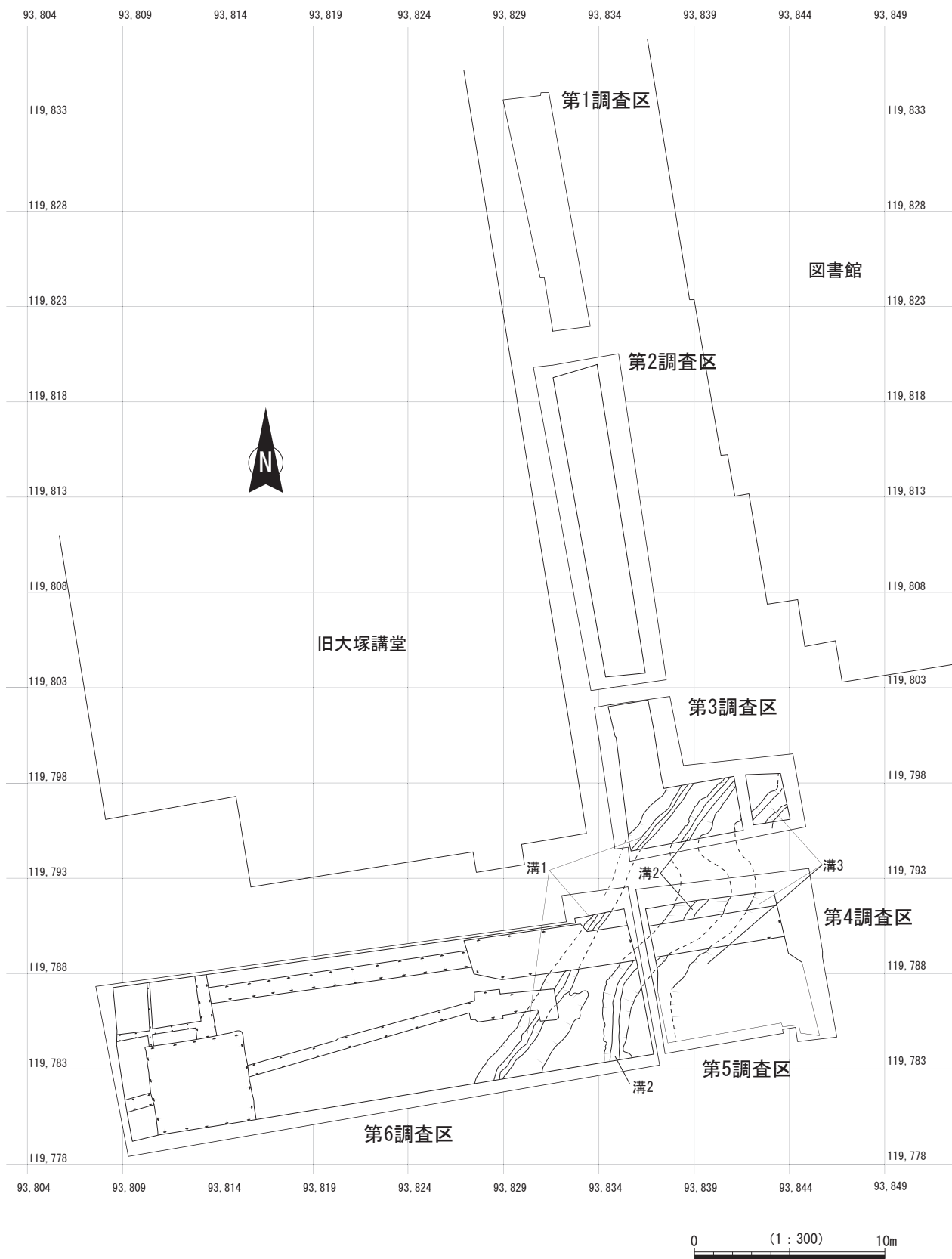
第37図 溝1～3完掘状況（南から）

遺物はほとんど出土しておらず、弥生土器の胴部と考えられる小片が1点出土している。図化はできないものの、胎土からみて弥生時代前期の可能性が高い。

溝2 第3～6調査区に位置する。6層上面で検出され、検出面の標高は1.8mである。残存長16m前後、最大幅2.4m、底面の標高1.15mで、検出面からの深さ65cmである。第4調査区北壁土層断面（第35図）では、埋土に粘質土層が4層確認される。遺物は出土していない。井戸1に切られる。

溝3 第3～5調査区に位置する。6層上面で検出され、検出面の標高は1.9mである。残存長14.5m前後、幅1.2m、底面の標高1.2mで、検出面からの深さ70cmである。南側の第5調査区では、溝の平面形が不明瞭であるが、これは上層の旧河道1による攪乱を受けたことが要因と考えられる。遺物は出土していない。

これらの溝から時期を知りうる遺物は出土していないが、いずれも6層上面から検出されている。既往の調査成果によると、本調査地点6層に相当する「暗褐色粘質土」上面で検出された遺構は、弥生時代I-1・2様式に位置づけられる（中村2000）。他地点では、弥生時代I-2様式の水田やこれに伴う用水路が検出されており、溝1～3も用水路としての機能を想定すれば、I-2様式に位置づけられる可能性が高いといえる。また、これらの溝は並行し、底面の標高も近いことから、同時期に機能していた可能性が考えられる。周辺の調査成果では南西から北東へ標高が低くなることがわかっており、これらの溝も同様の水流方向が想定される。



第38図 第3遺構面全体図

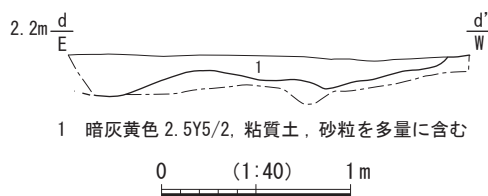
3. 第2遺構面の遺構と遺物

(1) 旧河道・溝

旧河道1（第35・39～43図、図版3・4）第3～5調査区に位置する。表土・攪乱を除去した5層上面から検出された。本旧河道は、第3調査区では1条、第4調査区で2条に分岐し、第5調査区では再び1条となる（第41図）。幅1.4～5.0m、底面の標高は南西で1.75m（第35図）、北東で1.85m（第39図）で、検出面からの深さ30～80cmである。埋土は単層で暗灰黄色2.5Y5/2の粘質土、砂粒を多量に含む。後述する井戸1を切っている。

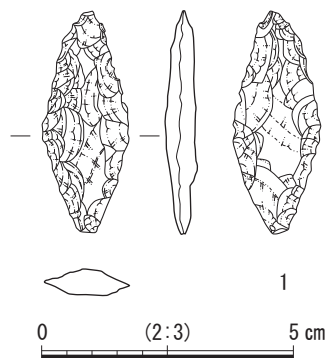
出土遺物には、サヌカイト製打製石鏃、弥生土器、須恵器、堅果類がみられる。1（第40図）は凸基式の打製石鏃で、長さ4.4cm、幅1.7cm、重量3.8gである。両面のほぼ全面が調整されるが、一部主要剥離面が残る。河内平野では弥生時代中期中葉から後期段階になると打製石鏃が大型化し、重量が3g以上のものが5割を超えると指摘される（寺前2010）。これをふまえると、本例は大型の打製石鏃であることから、時期は弥生時代中期中葉以降の可能性が高いといえる。

2～13（第42図）は弥生土器あるいは土師器である。2は壺の口縁部である。復元口径は22.0cmである。弥生時代I-3・4様式であろうか。3は口縁部片で、端部外側は玉縁状に肥厚する。4は高杯もしくは壺の口縁部と考えられる。5は壺の口縁部で、復元口径20.6cmである。弥生時代V～VI様式である。6は壺の頸部で、弥生時代V～VI様式と考えられる。7は甕の口頸部である。復元口径は17.6cmである。弥生時代V～VI様式である。8は甕の口頸部である。復元口径は14.1cmである。弥生時代V～VI様式である。9は胴部であろうか。10は高杯の脚部である。円形の透し孔が2か所に確認でき、本来は4か所に施されていたと考えられる。11は高杯の脚部であろうか。12・13は底部である。形態に加え胎土や外傾接合である点からみて、弥生時代前期に位置づけられる可能性が高い。12は内面にコゲの付着がみられる。



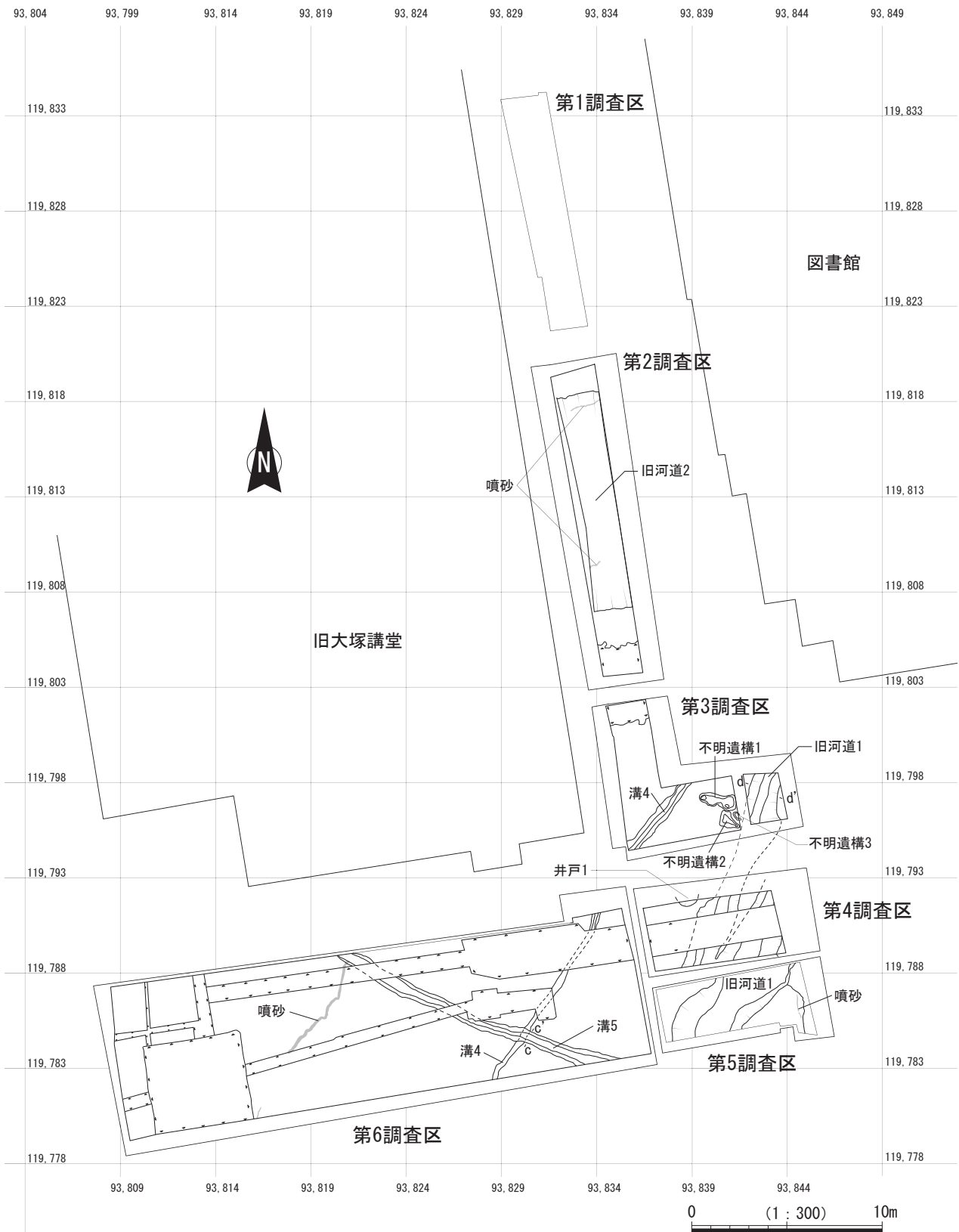
旧河道1断面（南から）

第39図 旧河道1土層断面

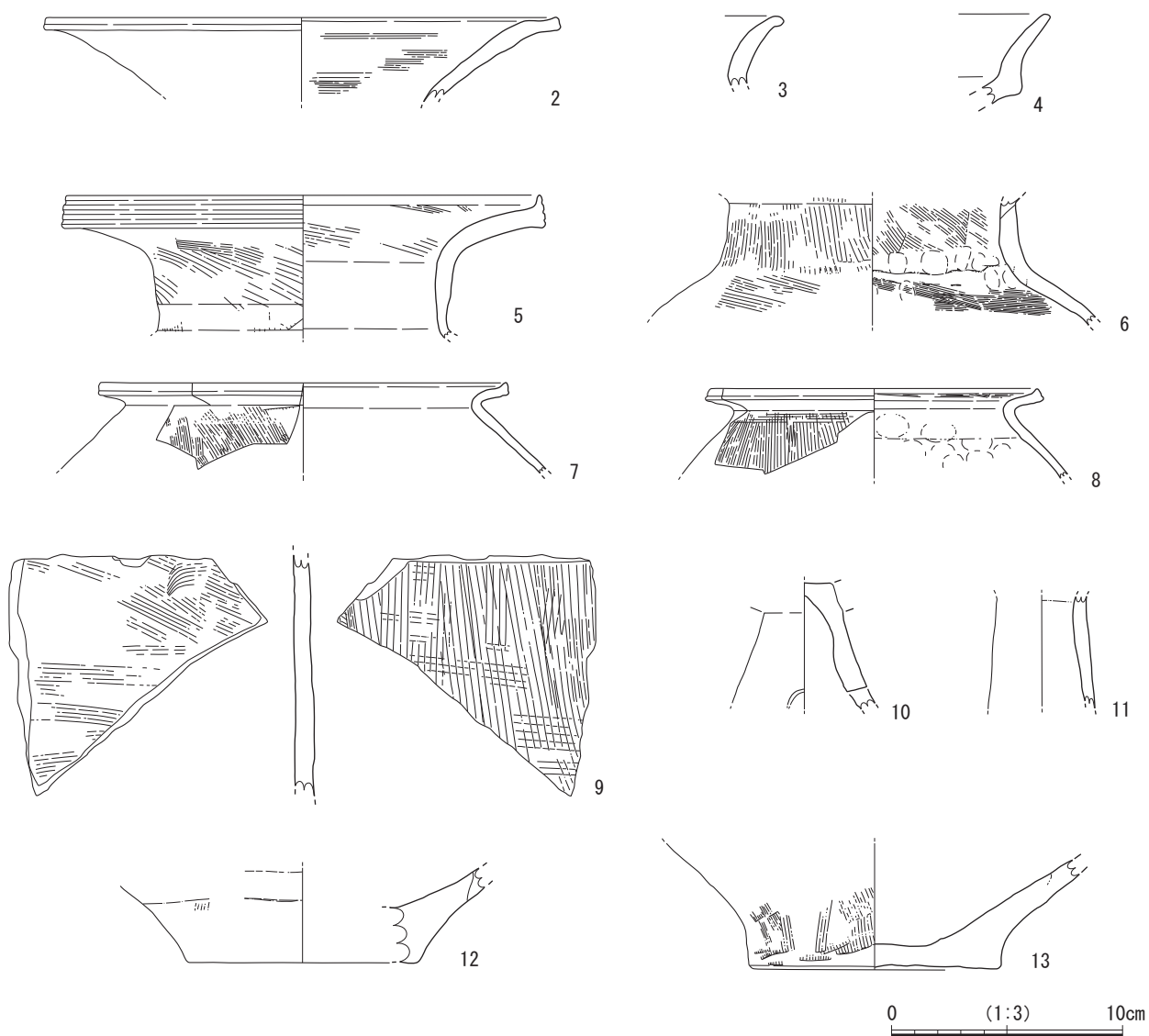


No.	器種	法量(cm)			重量(g)	石材	調査区
		長さ	幅	厚さ			
1	打製石鏃	4.4	1.7	0.5	3.8	サヌカイト	5

第40図 旧河道1出土遺物1

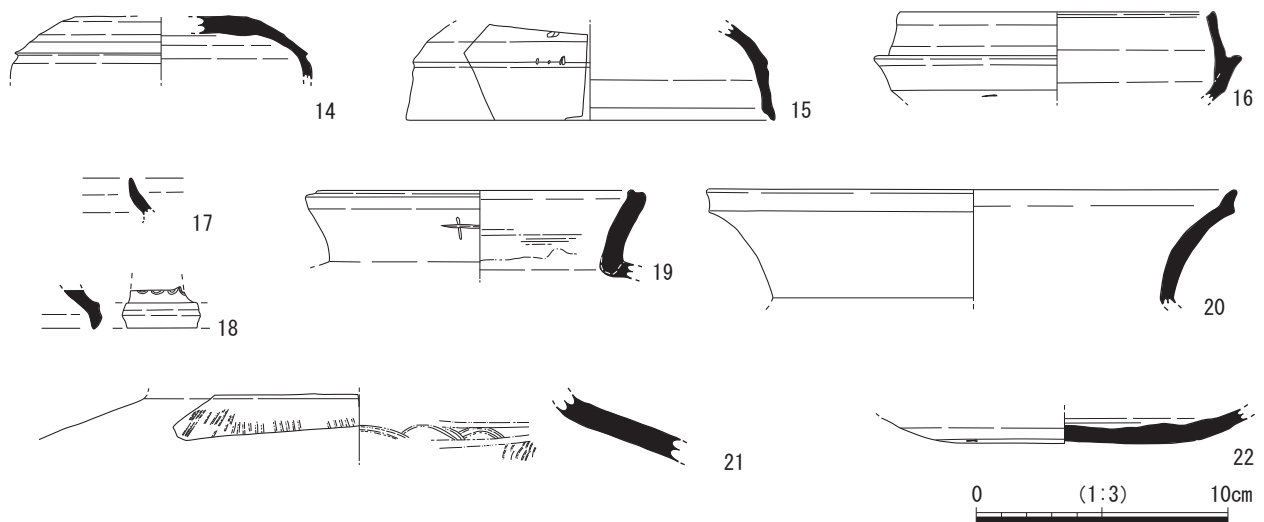


第41図 第2遺構面全体図



番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
2	旧河道1	弥生土器・壺	22.0	-	-	ナデ/刷毛目、ナデ	灰黄褐10YR6/2/ にぶい黄褐10YR6/3	細、長石	5
3	旧河道1	弥生土器/土師器・甕	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい橙5YR7/4/ 橙5YR6/6	細、長石	-
4	旧河道1	弥生土器・壺	-	-	-	ナデ/ナデ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/4	微細、長石	-
5	旧河道1	弥生土器・壺	20.6	-	-	擬凹線3条、刷毛目、ナデ/ 刷毛目、ナデ	にぶい橙5YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/4	微細、長石	5
6	旧河道1	弥生土器・壺	-	-	-	刷毛目/刷毛目、ユビオサエ	にぶい黄褐10YR7/2/ にぶい黄褐10YR7/2 橙5YR6/6/ にぶい褐7.5YR5/4	微細、長石、角閃石	5
7	旧河道1	弥生土器・甕	17.6	-	-	刷毛目、ナデ/ナデ	にぶい黄褐10YR6/3/ にぶい黄褐10YR7/3	微細、長石、雲母	5
8	旧河道1	弥生土器・甕	14.1	-	-	刷毛目、ナデ/ ユビオサエ、ナデ	にぶい橙5YR6/4/ 明赤5YR5/6	細、石英	-
9	旧河道1	弥生土器/土師器・甕	-	-	-	刷毛目/刷毛目	にぶい橙5YR6/4/ 明赤5YR5/6	細、石英、角閃石	4
10	旧河道1	弥生土器/土師器・高杯	-	-	-	透し孔、ナデ/ ナデ、ユビオサエ、シボリ痕	橙5YR7/8/橙5YR7/8	微細、石英、角閃石	5
11	旧河道1	弥生土器/土師器・高杯	-	-	-	ナデ/-	にぶい橙5YR6/4/ 灰5Y4/1	細、長石	4
12	旧河道1	弥生土器・底部	-	10.0	-	刷毛目、ナデ/ナデ	にぶい橙7.5YR7/4/ にぶい黄橙10YR7/3	細、石英、角閃石	4
13	旧河道1	弥生土器・底部	-	10.7	-	刷毛目、ナデ/ ナデ、ユビオサエ	橙5YR6/6/橙5YR6/6	細、石英、長石、角閃石	2

第42図 旧河道1出土遺物2



番号	遺構	器種	法量 (cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
14	旧河道1	須恵器・杯蓋	—	—	—	回転ナデ、回転ヘラケズリ/ 回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石、角閃石	6
15	旧河道1	須恵器・杯蓋	14.6	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/0/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	5
16	旧河道1	須恵器・杯身	12.4	—	—	回転ナデ、回転ヘラケズリ/ 回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石	4
17	旧河道1	須恵器・杯身	—	13.6	—	回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N7/0	微細、長石	—
18	旧河道1	須恵器・高杯	9.2	3.2	4.5	波状文、回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、石英、長石	—
19	旧河道1	須恵器・壺/甕	12.2	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰白N7/0/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	4
20	旧河道1	須恵器・甕	21.1	—	—	回転ナデ/回転ナデ	灰N6/1/灰N6/1	微細、長石	—
21	旧河道1	須恵器・甕	—	—	—	平行タタキ、自然釉/ 当て具痕、ナデ	灰オーブ7.5Y4/2/灰白N7/0	微細、長石、角閃石	5
22	旧河道1	須恵器・杯身/杯蓋	—	14.0	—	回転ナデ、回転ヘラケズリ/ 回転ナデ	灰5Y6/1/灰5Y6/1	微細、石英、長石	4

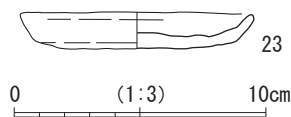
第43図 旧河道1出土遺物3

14～22（第43図）は須恵器である。14・15は杯蓋であり、14は天井部と口縁部境界の稜は短い。15の稜は丸みをおび、復元口径は14.6cmである。16・17は杯身である。16は復元口径12.4cmである。口縁端部に段が形成されるが、鈍く不明瞭である。受け部は短い。胴部下半には回転ヘラケズリが施されている。17は杯身の口縁部であり、短く内傾し端部は丸い。14～16はMT15型式前後と考える。18は高杯の脚部と考えられる。端部は下方にのび、稜がみとめられる。透しが1か所確認でき、その下端に波状文が施されている。19は壺もしくは甕の口頸部である。復元口径12.2cmである。口縁端部には強いナデが施され、頸部は強く屈曲する。口縁の外面に十字のヘラ記号が施されている。20は広口甕の口縁部である。復元口径は21.1cmで、口縁部は端部で屈曲し上にのびる。21は甕の頸部と考えられる。復元頸部径は18.5cmである。22は杯身の底部もしくは杯蓋の天井部である。19～22の時期は絞り込めないが、古墳時代から古代の幅におさまるものと考えられる。

第4調査区北壁土層断面（第35図）では、本旧河道は井戸1を切っており、井戸1が埋没したのちに形成されたことがわかる。なお、井戸1から布留0～1式期の土器が1点出土しており、こ



出土状況(西から)



番号	遺構	器種	法量 (cm)		
			口径	底部	器高
23	旧河道2	土師器・皿	9.2	—	1.4
文様・調整 (外/内)		色調(外/内)		胎土	調査区
回転ナデ、ヘラ 切り/回転ナデ		にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい橙7.5YR6/3		微細、 雲母	2

第44図 旧河道2出土遺物

れが井戸の廃絶時期を示すとすれば、本旧河道は布留0～1式期以降に形成されたといえる。本旧河道出土遺物の時期幅は弥生時代前期～古代である。よって、本旧河道の所属時期は、上限が古墳時代前期、下限が古代といえよう。

旧河道2（第34・41・44図、図版4） 第2調査区に位置し、東西方向にのびる。5層上面にて検出され、4層に覆われている。検出面の標高は2.3mである。最大幅11m前後である。湧水のため底面まで掘削できなかったが、検出面からの深さは75cm以上である。埋土は6層に分けられる（第34図）。溝の位置や幅から判断すると、第25次調査地点（附属図書館蔵本分館増築Ⅱ期地点、第3章）で検出された旧河道に連結する可能性がある。

出土遺物は、第2調査区中央付近において、検出しえた最下層（d層）より、土師器の皿（23）が出土した（第44図）。口縁部の一部が欠損している。口径9.2cm、器高1.4cmである。底部はヘラ切りである。徳島県三好郡三好町大柿遺跡の古代～中世の土器編年（氏家2005）を参考にすると、皿の年代は11世紀代に位置づけられる。

なお、本旧河道と連結する可能性がある第25次調査地点の旧河道からは、遺物がほとんど出土しておらず時期は不明である。検出層位や遺物から本溝の所属時期を絞り込むことは困難であるが、弥生時代Ⅰ－3・4様式～中世の一時期といえる。

溝4（第36・41図） 第3・6調査区にまたがり、南西から北東にのびる。5層上面にて検出され、4層に覆われている。検出面は標高2.4mである。残存長19m前後、幅0.2～0.7m、底面の標高1.9mで、検出面からの深さ50cmである。埋土は単層でにぶい橙色7.5YR7/3の砂層である（第36図）。溝5に切られる。

出土遺物は、須恵器片1点、土師器片1点が確認されたが、図化できるものはない。

本遺構の所属時期は、層位から判断すると弥生時代Ⅰ－3・4様式～中世の一時期といえる。

溝5（第36・41・45図） 第6調査区に位置し、おおよそ北西から南東にのびる。5層上面で検出され、4層に覆われる。検出面は標高2.25mである。残存長14.5m、幅0.5～0.9m、底面の標高1.75mで、検出面からの深さ50cmである。埋土は2層で、上層はにぶい黄褐色10YR7/3粘質土、下層は灰白色10YR7/1シルトである（第45図）。溝4を切る。

埋土から弥生土器片1点が出土しているが、小片のため図化できなかった。

本遺構の所属時期は、層位から判断すると、弥生時代Ⅰ-3・4様式～中世の一時期である。

(2) 井戸

井戸1 (第35・41・46図、図版4) 第4調査区に位置する。5層上面にて検出され、検出面の標高は2.2mである。掘方の約2分の1を検出した。平面形態は円形で、最大幅2.1mである。検出面から1.75mほど掘削しているが、湧水のためそれより下は掘削できなかった。埋土下層のf～i層は粘質土で、上層のa～e層は砂質土である。遺構の切り合い関係をみると(第35図)、溝2→井戸1→旧河道1の順で形成されたことがわかる。

出土遺物は土師器の甕(24)が、現状の埋土最下層にあたるi層より出土している。i層は1.35m以上堆積していることから、井戸を廃棄する際に埋め戻され、甕はその過程で廃棄されたものと考えられる。胴部下半の一部分が欠損するもののほぼ完形である。口唇部はナデによって凹み、上方に肥厚する。頸部の屈曲は強く、「く」の字状を呈する。胴部は球状を呈し、底部は丸底である。外面調整は全体に刷毛目が施された後、底部付近に横方向の強いナデにより、刷毛目が消される。内面調整は胴部にヘラケズリと頸部と底部にユビオサエがみられる。外面にススが付着する。底部にはあまり付着していないが、胴部への付着は著しい。内面にはコゲがみられる。本土器の類例として、黒谷川郡頭遺跡昭和59年度調査の方形周溝墓2号墓土壙域出土の供献土器(菅原編1986)があげられる。これは、黒谷川Ⅳ式(大西編1990)に相当し、布留0～1式期に併行する。したがって、本土器もこの時期の所産と考えられる。

井戸の埋土から出土した土器からみて、この井戸の廃絶時期は、布留0～1式期の可能性が高い。

(3) 不明遺構

不明遺構1 (第41・47図) 第3調査区の東部に位置する。5層上面で検出され、検出面の標高は2.1mである。平面形態は不整楕円形を呈し、長軸2.0m、短軸0.8mである。底面の標高1.9mで、検出面からの深さ20cmである。埋土は単層で、暗灰黄色2.5Y5/2の粘質土である(第47図)。

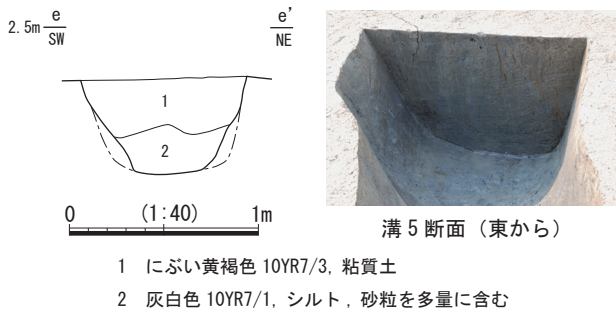
埋土から土器片が3点出土しているが、図化できるものはない。

不明遺構2 (第41・47図) 第3調査区の東部、不明遺構1の南に位置する。5層上面で検出され、検出面は標高2.1mである。平面形態は不整三角形で、長軸1.1m、短軸0.8mである。底面の標高1.95mで、検出面からの深さ15cmである。埋土は単層で、暗灰黄色2.5Y5/2の粘質土である(第47図)。

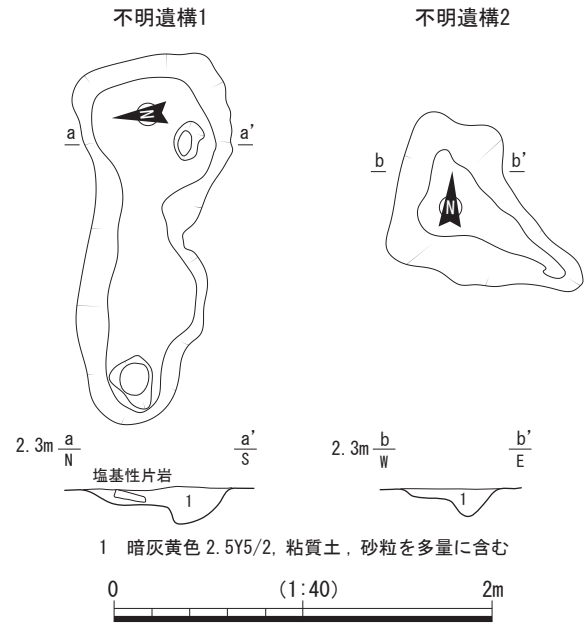
遺物は出土していない。

不明遺構3 (第41図) 第3調査区の東部、不明遺構2の東に位置する。5層上面で検出された。平面形態は楕円形を呈し、長軸0.5m、短軸0.3mである。埋土は単層で、暗灰黄色の粘質土である。

遺物は出土していない。



第45図 溝5

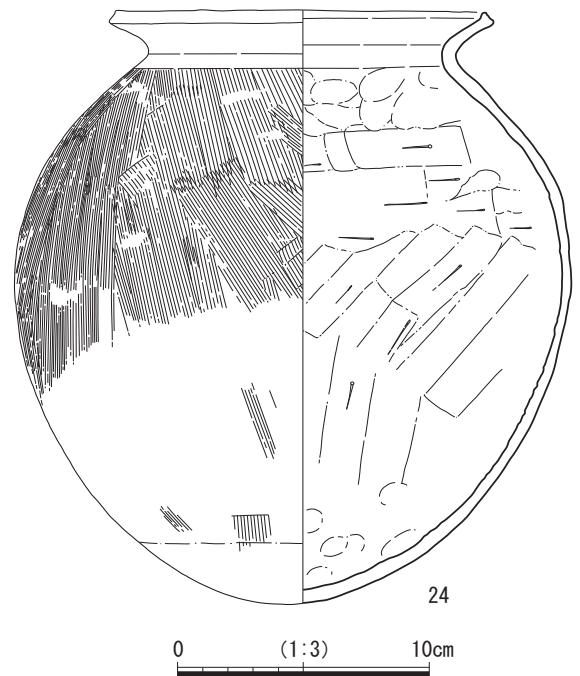


不明遺構1断面（西から） 不明遺構2断面（南から）

第47図 不明遺構1・2

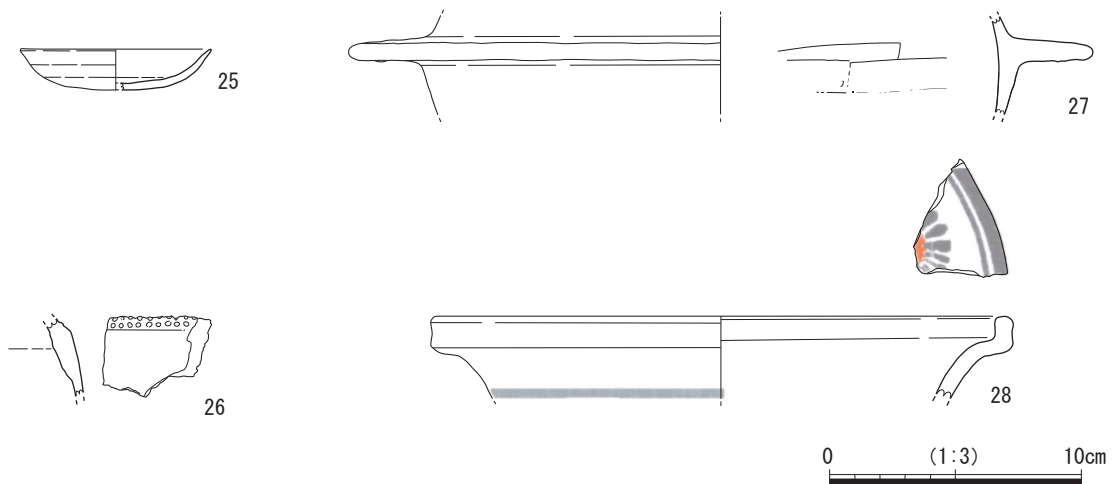


井戸1断面（南から）



番号	遺構	器種	法量(cm)			文様・調整(外/内)	色調(外/内)	胎土	調査区
			口径	底部	器高				
24	井戸1	土師器・甕	14.6	—	23.5	ナデ、刷毛目/ナデ、ヘラケズリ、ユビオサエ	にぶい橙7.5YR6/4/ にぶい黄橙10YR6/3	微細、長石、雲母	4

第46図 井戸1出土遺物



番号	器種	法量 (cm)			文様・調整 (外/内)	色調 (外/内)	胎土	調査区
		口径	底部	器高				
25	備前焼・燈明皿	7.6	—	1.6	ナデ/ナデ	黒褐2.5Y3/1/ 灰褐5YR6/2	微細	2
26	瓦質土器・火鉢	—	—	—	円形浮文状の突起、ナデ/ナデ	オリーブ黒5Y3/1/ 暗灰黄2.5Y5/2	微細	3
27	瓦質土器・羽釜	—	—	—	ナデ/ナデ	灰N4/0/灰5Y5/1	微細	3
28	瀬戸・美濃系陶器・鉢	23.0	—	—	灰釉圏線、回転ナデ/ 鉄釉花文様・圏線、回転ナデ	灰白2.5GY8/1/ 灰白2.5GY8/1	微細	6

第48図 攪乱出土遺物

(4) 攪乱出土遺物 (第48図、図版4)

第2調査区からは備前焼の燈明皿1点(25)が出土している。時期は近世と考えられる。

第3調査区からは陶器片2点・磁器片3点・瓦質土器片3点が出土し、このうちの2点を図化した。26は瓦質土器の火鉢であり、外面には直径2mmの円形浮文状の突起が2段みられる。時期は近世である。27は瓦質土器の羽釜である。復元鏝部径は29.4cmである。内外面ともにロクロによる回転ナデがみられる。外面にはススが付着している。時期は幕末と考えられる。本遺跡第2次調査(体育館新営地点)東西大溝101の出土遺物(定森・中村編2005)に類例がみられる。

第6調査区からは、瀬戸・美濃系陶器片が出土している。28は内外面に鉄釉による文様が描かれており、内面に菊花文が配されている。時期は19世紀代と考えられる。

4. まとめ

本調査の主な成果を以下に整理する。まず、第3遺構面で検出された弥生時代I-2様式(前期中葉)に位置づけられる可能性が高い溝1~3が注目される。これらはほぼ並行し、ともに検出時の幅1.5m程度である。また、底面が機能時の標高をとどめていたとすれば、南西から北東方向への水流が想定される。第27次調査(立体駐車場新営地点)、第29次調査(学生支援センター改修地点、第6章)でも、同時期の溝群が検出されており、水田などに伴う水路とみられる。以上が、庄・蔵本

遺跡における弥生時代前期の集落構造を把握するうえで重要な調査成果といえる。

第2遺構面では、布留0～1式期の土器を伴う井戸が1基検出された。本遺跡第2次調査（体育館新営地点）井戸201の上層からも、形態的に類似する同時期の甕1点が出土している（定森・中村編2005）。山崎孝盛（2005）は、井戸から出土した完形土器について、奈良県の事例を中心に検討を行っている。これによると、弥生時代後期から庄内式期の井戸からは複数の壺が出土するのに対し、古墳時代前期の井戸では1点ないし数点の甕が出土するようになるという。本調査地点でもこれと同様の事例が確認されたといえる。これらの事例は、井戸廃棄時に行われた祭祀行為の痕跡とみられている。

（脇山佳奈）

文献

- 中村豊，2000．阿波地域における弥生時代前期の土器編年．田崎博之（編），突帯文と遠賀川．土器持寄会論文集刊行会，愛媛，pp.471-498．
- 大久保徹也，2002．中国・四国地方の土器．赤塚次郎（編），考古資料大観2，弥生・古墳時代土器Ⅱ．小学館，東京，pp.159-168．
- 大西浩正（編），1990．黒谷川郡頭遺跡Ⅴ．徳島県教育委員会，徳島．
- 定森秀夫・中村豊（編），2005．庄（庄・蔵本）遺跡：徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書．徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島．
- 菅原康夫（編），1986．黒谷川郡頭遺跡Ⅰ．徳島県教育委員会，徳島．
- 菅原康夫・瀧山雄一，2000．阿波地域．菅原康夫・梅木謙一（編），弥生土器の様式と編年，四国編．木耳社，東京，pp.11-130．
- 田辺昭三，1981．須恵器大成．角川書店，東京．
- 寺前直人，2010．武器と弥生社会．大阪大学出版会，大阪．
- 氏家敏之，2005．大柿遺跡古代～中世の土器編年と遺構面の時期．大柿遺跡Ⅲ：四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告31，第8分冊まとめ／分析編，徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第60集．徳島県埋蔵文化財センター，徳島，pp.3-26．
- 山崎孝盛，2005．古墳時代の井戸祭祀に関する一考察：奈良県の井戸を題材として．岡山大学大学院文化科学研究科紀要20，71-87．